【第三種郵便物認可】　日本経済新聞（夕刊）　2002年1月17日

風&土 ㊿

生薬の執念

大和当帰守り育てる

大淀町）の阪本修司さん（62）。「おやじの代からの薬種商」である。富貴を含め、奈良県南域に残る数少ない産地を訪ね、生薬を買い集めるのが阪本さんの仕事。当帰のほとんどは大阪の問屋、栃本天海堂（栃本和男社長）に送る。問屋から製薬会社や病院、薬局へという経路になる。

長い目で見れば、漢方医療や生薬は見直されつつある。漢方を銘打った薬や薬局も増え、人々に漢とした関心は高まっている。しかし、実際にここで当帰にかかわる人々の気持ちは複雑だ。栽培する宮口さんが「当帰は難しい」と言うとき、栽培の苦労だけを指すのではない。大和当帰は品質がよく需要はあっても、価格としてはなかなか評価されないのだ。だから「当帰づくりに面白いことなんかない」とさえ言う。

阪本さんが薬種商になって四十年。この間、大和の生薬は衰退の一途をたどってきた。姿を消した生薬を幾つも見てきたから、ここの当帰についても、「消滅するかもしれない」と冷静な目で見る。

製薬や薬局部門を持ち、中国で生薬栽培も手がける栃本天海堂の栃本文男専務（59）は、「確かに人々の関心はある。でも社会的な位置づけは不十分。このままでは、当帰だけでなく、日本の生薬栽培がすたれる」と心配する。

減り続ける生産者と薬種商。規模が小さな生薬の問屋――。当帰で結ばれた糸は細く、なお細っているようにも見える。背景には西洋医学、西洋薬中心の医療、薬剤の仕組み、中国からの輸入増など難しい問題が山積している。

しかし、宮口さんは「阪本さんに言われて」と冗談めかしつつ、「日本一の当帰との自信はあるが、まだ奥の深い世界」と当帰づくりに意欲を燃やす。阪本さんは「栃本さんが買ってくれるから」と言いながら、「自分が育てられた大和の地の当帰は守りたい」と話す。栃本さんは「いずれ大和の当帰づくりが、漢方薬が評価される時がくるはず」と言う。細い糸は当帰が結ぶ執念の糸でもある。

□　■

彼らを支えるのは結局、細い絆（きずな）の端に、病に悩むたくさんの人々がいるとの思いだろう。尼崎病院の千七百人の患者のうち「多くが難病やそれに近い病気の人が来る」（松本さん）。十年、二十年通い続ける患者もいて、この人たちは処方された漢方薬をきちんと煎（せん）じて飲むそうである。

漢方や生薬の世界は、あいまいで難しい。即効性に乏しい漢方薬は、いつどんなふうに効いたのかわかりにくい。経験則が生きる世界であり、デジタル的な考え方だけでは割り切れない部分をたくさん持っている。いかがわしさが入り込む余地もあって、関心ある人々をも戸惑わせる。

今後、医と薬の世界で、こんな漢方や生薬がどう位置づけられるのか、予測は難しい。大阪大学附属薬用植物園の米田該典園長（58）は「あいまいな世界を一つ一つ解明し、わかりやすく人々に説明すること。それができる人材を育てること」と話す。松本さんは、神戸市の医療産業都市構想などの中で「地域が持つ漢方の伝統と蓄積を見直し、生かすことが、医療全体の充実につながる」と言う。

山村を巡りながら、阪本さんが今も感動を新たにするのは、薬草を求め歩き、育て、薬を工夫してきた先人たちの営々たる努力に対してである。阪本さんの自問は「根気のいい進歩。これを私たちは忘れてしまったのか」ということである。

（編集委員　山形健介）

「これ以上の患者さんはなかなか引き受けられなくて」――。兵庫県立尼崎病院東洋医学科で治療にあたる松本克彦県立東洋医学研究所名誉所長（68）は、病院の漢方治療の現状をこんなふうに話す。ここでは六人の医師が約千七百人の患者を抱え、目いっぱいの状態は十数年前から続いている。

西洋薬も使うが薬の基本は漢方薬だ。薬剤室には約百三十種の漢方薬が並ぶ。処方に合わせて薬を調合、パック状にして患者に渡す。二百五十ほどの処方はすぐにこなす。

□　■

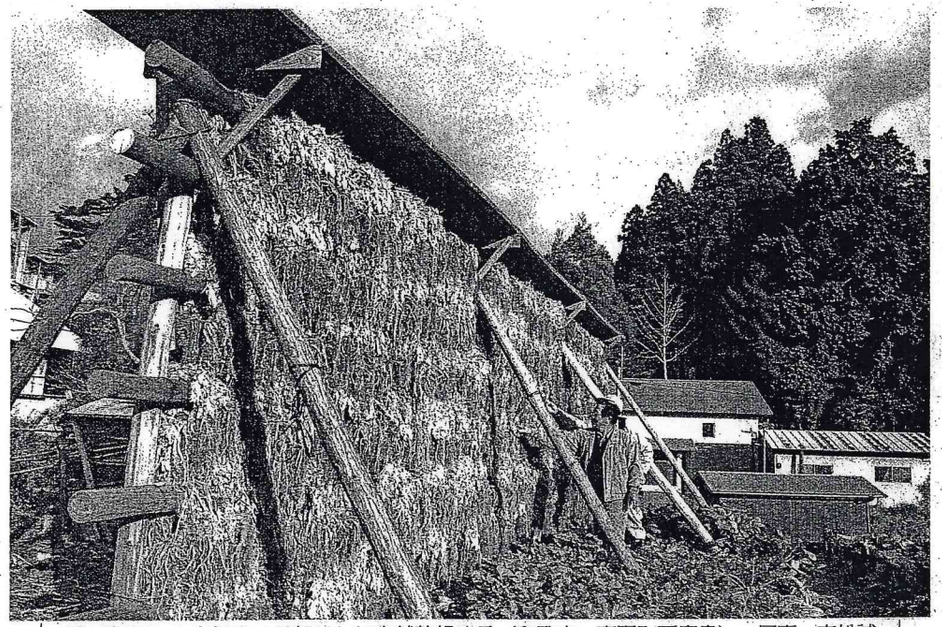
当帰（とうき）は代表的な生薬の一つである。中でも、奈良県南部から和歌山県にかけて産する大和当帰は、日本を代表する生薬だし、良質で古くから知られる。その中心的な産地が和歌山県の北東、奈良県との県境にある高野町西富貴。富貴は山々に囲まれた小さな盆地にある。

この季節、富貴では横木を渡したハザ場に当帰を架けている光景が見られる。昨年十二月に収穫した当帰を乾燥させるのが、今の厳寒の時期。一カ月後にはこれを湯に浸してもみ、再度乾燥させて、生薬としての当帰になる。

しかし、栽培に手間がかかるため、作る農家は減り、富貴でもかつて五十人ほどいた生産者は十人に、生産も年間十三トン程度に落ちている。

生薬になる当帰は多年生で、春の種まきから翌年末の収穫まで約二十カ月かかる。種を採る期間までを含めると足かけ四年。加えて連作はできないし、虫の駆除や草取りは、農薬や殺虫剤を極力使わずすべて手作業。乾燥も自然乾燥だ。こんな手間をかけても、どんな当帰がとれるかは予測できない。二十年以上当帰を栽培する宮口進さん（72）が、「とにかく難しい作物」と言う理由である。

二カ月に一度ほど富貴を訪ねながら、「ええ当帰を作って」と農家を督励して歩く人がいる。阪本繁商店（奈良県



掘り起こした当帰をハザ架けして自然乾燥する（和歌山・高野町西富貴）＝写真　末松誠

メモ

当帰　セリ科の多年生草本。生薬の中では代表的な婦人薬として知られる。中国の言い伝えに、妻が婦人病を患い夫は家に寄りつかなくなったが、妻は、夫が「当（まさ）に家に帰るべし」と祈りながらこれを飲んで病気を治したとの話がある。当帰の名の由来である。国産では大和当帰が有名で、北海道産などと区別され、価格も違う。

近畿地方には、ほかにも「丹波黄連」など、古くから知られる生薬があるが、栽培農家の減少、中国産の増加などで生産量は減少している。

「風&土」は毎週、木曜夕刊に掲載します。次回は「文学豊穣の地へ」